

令和4年度 第1回北九州市発達障害者支援地域協議会

- 1 会議名 令和4年度 第1回北九州市発達障害者支援地域協議会
- 2 開催日時 令和4年8月1日(月) 19:00～20:40
- 3 開催場所 総合保健福祉センター 2階講堂
- 4 出席者
 - (1) 構成員(敬称略)
中村貴志、長森健、渡辺恭子、倉光晃子、尾首雅亮、今本繁、黒木八恵子、大坪巧弥、北野里香、田中惟子、伊野憲治、藤井敬太郎、國友信次(計13名)
 - (2) 事務局
障害福祉部長 吉村知泰
障害福祉部 精神保健・地域移行推進課長(発達障害担当課長) 角田禎子
障害福祉部 精神保健・地域移行推進課 事業調整係長 西島秀幸
 - (3) 関係者
障害福祉部 障害者支援課長 三好秀樹
あまもと小児科医院 院長 天本祐輔
- 5 会議次第
 - 【1 開会】
 - 【2 部長挨拶】
 - 【3 構成員紹介】
 - 【4 議事】
 - (1) 構成員、構成員の選出
 - (2) 北九州市発達障害者支援地域協議会の実施要領の説明
 - (3) 報告事項
 - ①発達障害児早期支援システム研究事業・健診研究会報告
 - ②令和3年度専門部会の最終報告
 - ③令和4年度の現状報告
 - (4) 意見交換
 - ①専門部会における共通の課題について
 - ②令和4年度の現状報告について
 - 【5 閉会】

6 会議経過・意見交換

(1) 座長、副座長の選出

構成員は中村貴志座長、構成員は長森健副座長に決定した。

(2) 北九州市発達障害者支援地域協議会の実施要領の説明

事務局より、協議会の内容や規定について説明を行った。

(3) 報告事項・(4) 意見交換

①発達障害児早期支援システム研究事業・健診研究会報告

(事務局より説明)

- ・令和3年度に実施した、発達障害児早期支援システム研究事業・健診研究会の報告を行った。
- ・当事業は、発達特性のある就学前の子どもの早期支援を進めるため、園医健診・かかりつけ医健診・特性評価の三層構造による早期支援システムの構築に向けた研究事業で、令和3年度は市内3カ所の保育所(園)の年中児(合計61名)を対象としてモデル実施した。
- ・方法としては、SDQ(子どもの強さと困難さアンケート)を行い、既存の園医健診を活用した上で、そこから支援が必要と思われる子どもを抽出し、小児科医の先生の健診(2次健診)に繋げ、MSPAという評価尺度を使い、対象児の特性をみていくもの。
- ・令和3年度実施分のアンケート結果については、スライド4のとおり。
うち、保護者アンケートの点数が高いケースで、まだ専門機関に繋がっていない6名について、2次健診に案内した。(全体のおよそ10%)
- ・6名のケースについて、この先の健診やサポートについて保護者に丁寧に説明を行った。うち、同意を得られた3名について、2次健診やMSPA実施を行った。
- ・保護者に、2次健診やMSPAを行う意味を理解していただくことの難しさや、保育者は支援に繋がりたいと思っているが、保護者は現状を問題視してないケースについての対応等が今後の課題である。
- ・令和4年度は、幼稚園で実施する。今回は、つばさや特別支援教育相談センターにも関わっていただき、多職種目で判断していきたい。また、前回同様、2次健診等への案内は「保護者アンケートの点数」を基準とするため、保護者に児の状況をいかに気づいてもらえるかというのが課題として残されている。

(構成員)

- ・今後の課題として、フォローする上で、つばさのみではマンパワー不足と書かれているが、どの程度必要とか、フォローする先など考えているか。

(事務局)

- ・今回はモデルということで、市内3カ所で実施しているが、市内全域に対象を広げた時、つばさだけでなく色々なサポートができる方が必要となることが予想されるため、それもふまえて、令和4年度は、特別支援教育相談センターにも入っていただいている。

(構成員)

- ・この研究事業と一緒に参加させていただいておりました小児科医ですが、実際やってみると、マンパワーは要るし、2次健診で保護者にどういった指導をするべきなのか、どんな場所に繋がればいいのかということが、小児科医の中でも、どうしようかと話題にあがっている。

ただ、まずスタートすることが大切ということで、このシステムを構築するための研究事業を、市の主導のもとやったので、ここからまた課題を見つけつつ、ひとつずつ解決できる方法を探していこうと思っている。

(構成員)

- ・つばさがされたことを見ながら、そこから教育相談や就学相談等に繋がっていくケースであれば、丁寧に対応していきたい。個別のケースなので、就学前で不安な保護者の悩みを少しでも解消できたら良いと思っている。

(構成員)

- ・有意義な取り組みと思い、昨年度はかなり手間暇かけて、園への訪問であったりとか、色々とさせていただいた。MSPAはかなり難しく、知らない子どもを聞き取り、判断するのは少し自信がなかったので、2人で臨むことにした。医師からの適切な助言や、保護者へ結果を返す際、園の先生にも同席していただくなど、色々フォローしてもらった。このような体制でやることができたという感じで、有意義ではあるが、かなり労力がかかり、この先広めていくのは課題かもしれないと思っている。

(構成員)

- ・ニーズのある子を早期に掬い上げるために、こういうシステムも必要とは思いますが、何よりも現場での実践可能性というか、負荷がかからない中で、確実に根づくシステムづくりも大事と思う。先ほどの報告にもあったように、実施した中での大変さをどう円滑にするかとか、また誰でもできるようにしていくということはブラッシュアップしていく必要がある。ひとまず3ケースは実践できたということなので、これを切れ目のない支援に繋げていくことが、地域における発達障害支援だと思う。幼稚園での実施についても、どう繋がっていくか等、今後報告いただけたら楽しみである。

(構成員)

- ・良いサンプルとは思いますが、このアンケートをとる前に、親御さんに対し、実施する意味や、発達障害に関してきちんと説明等を行ったのか。早く気づいてあげなければ、将来の支援にスムーズに繋がらない等、そういうことをきちんと事前説明した上でやったのか。

(事務局)

- ・直接一対一で、保護者に説明できたわけではないが、園の先生方には、このアンケートを取る意味等を説明した上で行った。園の先生方自身が、実際に困っていたり、自分たちもちょっと気になる子もいたり、これが一つのきっかけになればということだった。実は、在籍している園児さん全員からアンケートを回収することはできた。その後、点数によってはサポートに介入したいということは書いてはいたが、確かに構成員の言われるように、いかに早期支援が大切かということは、どこまで保護者に伝わっていたかはわからない部分はある。

(構成員)

- ・そこを徹底していけば、発達障害の理解も深まっていく。園全体で、親の会等を開いていただいて、そこにつばさから説明に行ってもらおうとか、早期支援の重要性をその場で訴えたりとか。

(構成員)

- ・啓発というのは重要なテーマで、こういった取り組みを行う際に、併せて情報提供をしたり、誰もが情報に繋がっていけるような手続きが、更に必要と思う。

(構成員)

- ・2次健診等に繋がる6名のケースから、3名が辞退したという話があった。今回の試みは大変重要とは思いますが、どちらかというやはり現状把握と評価どまりで、具体的にこの先どうなるかというのを示さなければ、やはり二の足を踏んでしまうのではないかと。この結果を行動計画等に反映して、保育園で一緒にやっていくとか、そういったところに今後は繋がるのか。

(事務局)

- ・結果を保護者に説明する際は、保育園の先生にも立ち会っていただき、健診をしてそこで終わりではなく、家庭や保育園の中での対応方法に活用できるものがあれば活かしていきたいという説明はさせていただいたが、先々を見据えたような形で保護者の方が納得できるように示せたかどうか、課題はあるかもしれない。

(構成員)

- ・親の視点から、MSPAにしても、実施して、だからどうなのかというのはある。現状はもうはっきりと親の中では十分わかっていて、やはりその後の繋ぎのところをどう考えていくかというのが重要で、それ次第で逆にやりたいという親御さんも増えてくるのかと思う。

(事務局)

- ・今年度は、まだアンケートを回収している段階なので、どのようにサポートを繋げていくか、今日いただいた意見を活かしながらやっていこうと思う。

(関係者)

- ・この取り組みがどこを目指しているかというと、将来的には4歳5歳児健診等でこれを行い、発達障害に関する健診を受けることは、全員が参加するもので、普通のことであり、参加してチェックを受けるのも、それは診断をつけることではなく、その子の特性を把握し、早い段階からサポートできるようにするために、健診が一般的になり、みんな1回はチェックを受けるという、そんなシステムにすることをイメージして実施している。MSPAについても、親御さんはそんなことわかっているよと思われるかもしれないが、子どもの成長に伴いサポートする団体が変わっていくので、スムーズな引継ぎ等で説明しやすいひとつのツールとして、使っていただけるような形を理想と考えている。

(構成員)

- ・今のお話からは、サポートする人をどう養成していくかというのが大きな課題となっていくという言葉を思い出した。

②令和3年度専門部会の最終報告

(事務局より説明)

- ・北九州市発達障害者支援地域協議会の設置目的、協議内容、令和3年度の構成と開催実績に

ついて資料をもとに説明を行った。

- ・調査・骨格検討部会では、発達障害のある人の生活を支える「基本の手立て」の定義、および現状分析、実態調査の企画実施を行った。(定義に含まれる下位の要素(6項目)など)
- ・第一部会では、幼児期から成人後までの重層的な支援システムについての検討と、健診や治療、相談などをの機会を活かした「特定の気づき・理解」も含めて検討した。
- ・第二部会では、行動障害についての一貫したシステムの構築を検討した。
- ・部会の共通目標を、「発達障害があってもその障害が重くても、地域で支え、地域で育ち、地域で暮らし地域に貢献するという環境をつくる」とした。
- ・3つの専門部会での議論を踏まえ、今後は3つの項目に着手する。
 - 1 基本の手立ての実施方法等に関する広報啓発
 - 2 専門機関へ相談に係るガイドライン作成
 - 3 強度行動障害に係るアウトリーチ支援の企画検討

③令和4年度の現状報告

(事務局より説明)

- ・基本の手立ての実施方法等に関する広報啓発に繋がるものとして、当課のホームページの整理を行った。今後も情報発信の方法を工夫したい。
- ・広報啓発の一環として、発達障害のある方の困った事例と対応方法に関するリーフレットの提案を行った。
- ・専門機関への相談に係るガイドラインの作成に関して、情報収集のためのシート作成の提案を行った。
- ・強度行動障害に係るアウトリーチ支援の企画検討に関しては、この協議会等からもご意見をいただきながら、組み立てていきたい。

(構成員)

- ・調査・骨格検討部会で、基本の手立てを定義することができたことが大きな実りであった。定義にあたり、各分野の現場で実態調査を行ったが、それぞれ発達障害のある人たちに関する知識や情報は持っているが、本当にこれで良いのか、効果が上がっているのか、正解なのだろうかという不安や困り感を持っている方が多くいた。なので、基本的な知識や技術の発信と、その実行を地域で共有できる、研修や情報交換の体制が求められている。専門機関を支える場だけでなく、ご家族や当事者の方も交わるように、そして縦の切れ目ない体制づくりにも繋がるように展開ができればよいと思う。

(構成員)

- ・第二部会の部会長を担当した。潜在的に、本人や環境を含めてそうなりやすい特性があり、また非常に劣悪な環境であったり、適切な支援、療育が受けられなかった人が、強度行動障害として、非常に激しい障害となる。しかし、しっかりとした支援が行われていれば、かなり軽減されるものだと思う。また、保護者のニーズ等も多様化しており、それを満たすためにもサービスの整備が大事である。今現在、ショートステイや、居宅サービス等地域で暮らすためのサービスの基盤が、北九州市は他と比較すると整っていない現状で、もう少し底上げしていかな

ければいけない。福祉の職員や、教員のスキルアップ、情報の集約も非常に重要な課題である。そういったところも含めて、アウトリーチを整えていかなければ、部門だけができて機能はしないので、全体的な基盤整備を考えていかなければいけないと思う。

(構成員)

- ・第一部会を担当したが、支援を効果的に行うために、一言で言うとコーディネーターの部分についてかなり議論を行った。コーディネーター間を繋ぐためにはどうしたらよいか、あるいはそのコーディネーターに繋がるためには、どういったガイドラインを作っていたらよいか、そして情報共有をしたり、発信したりという、情報のネットワークというものを整備していくことが大きなポイントである。

(構成員)

- ・第一部会の目指すものは、資料6ページの図と思うが、今のお話を聞いていると、本人家族の横に書くのは、「コーディネーター」になるのではないか。ライフステージに沿ってそれぞれのコーディネーターが伴走するかたちである。もうちょっと手を加えてわかりやすくした方がよい。
- ・強度行動障害の7つの提言について、先ほど支援者のスキルアップが重要であるとの話があったが、これは提言7にあたるのか。

(構成員)

- ・提言7だけではない。

(構成員)

- ・くるめさるくの事件もあったので、これを提言8にして、大々的に挙げていただきたい。

(構成員)

- ・支援者のスキルアップの機能を持っているのが、アウトリーチ支援チームでもある。アウトリーチは、学校や施設に行き、コンサルテーションや研修をやるという機能を持っている。また、提言7については、必要などころに必要な人材が配分されていないという現状がある。その地域で障害を持った方を支えていくためには、ショートステイや居宅介護、行動援護等が必要だが、北九州市は少なく、参入していただくためには、人材確保と予算配分等の取り組みが必要ということである。

(構成員)

- ・だとするとニュアンスが違ってくる。くるめさるくの事件は、通常の支援システムの中では受入れてもらえず、そういったところに頼らざるをえなかったという背景があったと聞いている。アウトリーチだけでなく、今ある施設の職員のスキルアップに力を入れていくべきなので、ぜひそういう項目も提言に加えていただけたらなと。

(構成員)

- ・重篤化して、緊急対応が必要な方の受け入れについては、提言4の拠点施設の整備を挙げている。これは福岡市にある「か〜む」という施設を想定したものだが、同様の施設を北九州市で今すぐ作ることは難しい。となると、受け入れるところとして想定できるのは、民間施設の中で場所を確保するであったり、市の機能として受け入れるところを確保するであったり、あるいは緊急の場合は精神科病院の活用ということも考えられるわけだが、そういった整備に

関することを提言4の中に含めた。現状ではか〜むのような施設はできないかもしれないが、民間の中で例えば1ヶ所だけとか、1室だけ確保して受け入れるとか、そういったことは可能ではないかと思うので、ぜひ議論していきたいところである。

- ・人材教育やトレーニングに関しては、特別支援学校や一般の福祉施設におけるトレーニングを幅広く行うことも必要と考えている。

(構成員)

- ・医師会の主張として、地域医療構想として、医療面で一番の大変な強度行動障害の方を受入れるのは公的病院の役目であるため、市立総合医療センターで見えていただかなければ困るいうことを一貫して主張してるが、なかなかそれが進まないというのが現状である。

(事務局)

- ・強度行動障害のアウトリーチについては、予算的なことや、今ある制度や支援体制ではなかなか難しいのが現状であるので、先ほど言われたように、コンサルや事業所の底上げを主にするというところで考えていく。どういったところにどういった人がいると一番良いか等、そういうのも描きながら考えないといけないと思う。
- ・市が行う人材養成については、委託をしているつばさで行われている研修が該当する。あと、保護者の対応も大事だと思うが、保育所・幼稚園の先生方へのアプローチも必要と思っている。子ども家庭局の所管とはなるが、早期支援システムの研究事業を通して、必要なスキルをどのように習得していくかについても、少しお話ができればと考えているところである。同様に、教育委員会でも教育の現場で色々と考えておられると思うので、繋がりができればよいと思っているところ。

(構成員)

- ・調査・骨格検討部会で定義した資料4ページのツールについて、親の立場からすると、色々なツールがあり、よくわからないということが課題だといつも思っている。色々なことは試してみるけれど、それがどのような効果があったのか評価ができない。本当にこのままで良いのかと、やりすぎて、結局負担に感じてやめてしまうということがある。できれば、手立てを作った際に、親御さんに対して、専門的な見地からフィードバックするようなことをやっていただきたい。
- ・強度行動障害について、今回のアンケートで可視化できたような気がするが、とても困ってる方が多く、切羽詰まっている状況で、コロナもあり行き場がなくなっているという報告が上がっている。くるめさるくの件もあるし、やはり行政の方で、事業者の評価調査をきちんとやっていただければありがたい。また、アウトリーチについて、障害に関しての支援だけではなく、家族等を含めた重層的な支援を考えていただければ相談しやすくなる。検討していただきたい。

(構成員)

- ・このご意見については、今後の課題という形でお引き受けしたい。

(構成員)

- ・調査・骨格検討部会の今後の取り組みの、スライド9に書かれてる支援者向け研修の括弧の中に書かれている「個に応じた支援を提案できるスキルの取得」とあるが、取得までではなく、

実行まで入れていただきたい。また、「地域支援者における支援の好事例に関する情報収集と横展開」と書かれてあるが、好事例だけなのか。色々な障害が組み合わさっているのが発達障害で、この好事例に適用的で、こういう事例が当てはまる実際の支援者や当事者が、どの程度いるのか。逆に言うと、こういう支援者を支援するシステムをつくらなければ、うまくいかないと思う。情報を持ってきて、それを分解して提供するというのを真剣に考えなければ、この研修のプログラム自体、実施したところで、なかなか実践できる人が育たないということになるのでは、と危惧している。例えば、教育支援計画や個別支援計画について、今も作られているということになっているが、少なくとも私どもの会議では、その計画自体、見せてもらったことがないという保護者が大半である。親も含めて、こういう支援計画、実行、結果の評価を、きちんとデータ化していかなければうまくいかないと思う。その中で、色々なパターンを組み合わせられるようなことを考えていかなければ、言葉ではわかるけれど、具体的にどうそのデータを活用していくかということが、実際に見えてこない。そういったところもちょっと踏み込んで、ぜひ検討していただければと思う。

(構成員)

- ・(発達障害のある方の困った事例と対応方法に関するリーフレットについて) 出すなら、もう少し検討してから出さないと、親からすると、こうなさいと言うけれど出来ないから困っているのであって、あまりにも作った方が、理解がないと思われがちになるので気をつけてください。

(構成員)

- ・ご専門の先生にもご意見いただきながら検討したいと思う。

(構成員)

- ・先ほどのご指摘に関してコメントさせていただく。まさに実態調査においても、現場の先生や支援者の方々は、基本的な専門知識は取り入れたとしても、個に応じた支援ができない、またそれが正解かどうか分からない、もしかしたら不適切なのかもしれないとの声があった。的確な実行を支える外部からのアプローチが必要で、それがおそらく学校でのコンサルテーションだったり、福祉現場のスーパービジョン的な体制なのであり、専門性の基盤となる基礎的知識だけではなく、それをこういう特性の人にこのように取り入れましとか、スケジュールをこのように導入しましたとか、あるいは好事例だけではなく、困難でこうやったがうまくいかないということを、地域でみんなで考え、一緒に検討できるような、ネットワークづくりというのが必要ではないかと思っている。そういった、誰かどこかのところで抱えるのではなく、みんなで支える共有できるというシステムにしてかなければならないということは、この部会中の実態調査でも見えてきているところなので、ご指摘いただいたものを形にできればと思っている。

(構成員)

- ・個別の教育支援計画について、作成の部分は特別支援教育相談センターでもさせていただいており、入学後、幼稚園や保育所で作ったものが、ちゃんと担任のもとに届き、活用されているのかというところの確認まで我々の方でもさせていただいている。入学後の様子を見ると、適用は概ね良いような状況である。小学校から中学校に進学する際も、就学相談等受けた方に

は作成し、引き継ぎをしている。しかし、中学校から高校については落ちているところがある。切れ目のないようにどう引き継いでいくのか、そこは課題だと思った。

(構成員)

- ・活発なご議論ありがとうございました。ただ今日だけでは不十分という感じがするので、事務局とも相談して、また検討させていただきたい。

(事務局)

- ・今後のスケジュール
事務局にて、次回協議会の日程調整を行う。